月刊

こころのとも

第十一巻
七月号

こころの荒廃

宗教と
聞いただけでも
危うさが
こみ上げてくる
日本人
真の宗教
失いし
当然の罰
世に示し
こころますます
荒れゆく日本

日本の病理

自己を制することを
教えない家庭・学校・社会

他者を制することばかり
教える家庭・学校・社会

人生を考え直して みたい人は（七八）

―『正法眼蔵』解説（二二）―

有時（うじ）の巻を続けます。

しかあれば、松も時なり、竹も時なり。時は飛去するとのみ解会（げえ）すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙（かんげき）ありぬべし。有時の道（どう）を経聞（きょうもん）せざるは、すぎぬるとのみ学するによりてなり。要をとりていはば、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時時なり。有時なるによりて吾有時なり。

例によって、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させて頂きます。

そういうわけであるから、松も時であり、竹も時である。時は、飛び去るとのみ理解してはならない。飛び去ることは、時の性能であるとのみ学んではならない。もし時が飛び去るだけのものであるとすれば、そこに間隙がでてくるであろう。この有時の仏道を心得ないのは、時は過ぎ去るとのみ理解するからである。そこで要旨をいえば、世界全体に存在するありとあらゆるものは、一つにつらなりながら、その時その時の絶対生命である。有時なるによって、畢竟（ひっきょう）それは、わが有時である。　これまでの復習を十分して頂きますと、今回分を理解するのも、そう難しいことではないように思えます。復習を兼ねながら、解説していきます。

まず「松も時なり、竹も時なり」ですが、何度も述べましたように、この世の「存在」にとって、時間が問題となりますのは、人間だけです。それは、人間は「何時までも生きていたいと思うのに死ななければならない」ということを意識することができることから生じます。

この世の「存在」とは、進化の過程順に言いますと、「物質」「生命」「精神」です。まず物としての地球ができ、その地球の海のなかで生命が誕生し、進化して現在のような人間が誕生しました。

こうしたこの世の存在は、すべて相対的で、時間的で、有限です。相互に依存しながら、自己の中に矛盾を含んで、運動しています。人は、それを、進化の結果として

人間になった時、自己と他己というあい矛盾する二つの、難しいことばで恐縮ですが、「弁証法的運動の契機」を得て、意識できるようになったのです。いつまでも生きていたいと思うのに、自分の意志に反して死んでいかなければならない。そういう矛盾を意識するのです。そこに、人間が時間を意識せざるをえなくなった根源があるのです。この世のあらゆる存在は時間的なのです。しかし、人間以外は、時間のままに、ただあるだけなのです。あす死ぬかもしれないとか、自分の子どもが死んでしまったとか、思い煩い、苦しむことはないのです。

次に出てきます「時は飛去する」ということですが、これは、このような意識を伴わない物理的といえる「時の流れ」を、人間の意識の世界に当てはめようとするものと言えます。もちろん人間も、過ぎ去っていく時を意識し、それと無縁では、勿論、ないのですが、しかし、ありがたいことに、人間にだけ、相対なものの本質である時間的で有限であることを脱する道が与えられているのです。それを、道元は説いているのです。

時間を飛去するものとだけ思うことは、人間だけがもつ時を超える力に気づかないことを意味します。もう既に、これまでに何度か述べましたように、人間は、「過去」と「未来」を統合しながら、「現在」を生きているのです。

時をただ「過ぎ去っていくもの」だと考えますと、現在は存在しなくなってしまいます。人間にとっての時間は、つねに現在が問題となるのです。この一番大切な現在が、なくなることで、道元が言う「時間に間隙ができる」ことになってしまうのです。

最後の部分ですが、現代語訳がもう一つですので、補足して解説しておきます。「尽界にあらゆる尽有」ですが、既に述べました、「この世のあらゆる存在」のことです。

「つらなりながら時時なり」ですが、尽有は、相対しながら、やがて滅亡する定めを背負って、弁証法的運動としての時間の中にあるということです。すでに述べましたように、尽有は時間の流れのなかに「あるがままにある」のです。しかし、人間だけが、自己と他己の分化によってそれを自覚できるようになりましたので、苦しみも生まれたのです。でも、有り難いことに、それと同時に人間はそれを克服する道も与えられているのです。それは、何度も何度も述べますように、修行（こころを磨くこと）によって、無意識の自己と他己を統合することです。その時、尽有が「有時なるによりて、吾有時なり」という境地になれるのです。

自作詩短歌等選

こころは垢だらけ

家や車はピカピカ
なのに
こころには
いっぱい
垢がついている

ボーダーレス時代

大人と子どもの
ボーダーレス時代

子どもも
自己責任で行動すべし

子どもも
大人と同じように
すぐ切れ
平気でうそを言い
平気で規則を破る

イスラム伸長の理由

イスラムが
伸びる理由に
平等を
目指す教理に
新鮮さ
感じる人の
多さがあると

不平等
是認する主義
民主主義
いつか革命
起こるは必定

範例を失った精神科医

精神科医も
裁判上
重要な判断をする

責任能力が
あるのかないのか

でも
もともと
精神を知らない
精神科医は
その判断が
できなくなっている

若者の
精神の荒廃が速く
過去の範例では
判断がついていけない
ということ

損得と選好

民主主義では
自己に執着して
全ての行動基準が
自分の
損得と
選好（選り好み）に
還元されている

精神病と自己肥大化

いま
精神病と正常の
ボーダーレス化が
起こっている

誰もが
多かれ少なかれ
自己肥大化した
ということ

若者のすさむこころ

人のいのちを
虫けらのいのちのように
もてあそぶ若者

かつて
ひあぶりの刑は
極刑であった
いま
いとも簡単に
生きたまま
灯油をかけて
火をつける若者

冷静に
何人も牛刀で傷つけ
平然と
死に至らしめる若者

若者のこころが
かくもすさんだ時代は
かつてない
何を
予知させるものか

動物がお手本

動物（犬猫）以下に
なってしまった
人間

その証拠に
動物の行動を
お手本にするのが
はやっている

他己喪失社会の病理

現代ほど
日本ほど
他己を失った社会は
ない
それが
全ての社会病理を
生んでいる

青少年の凶悪犯罪の増加
理由の薄弱な殺人
世界に類を見ない
少女の援助交際
あらゆる職業人の
倫理観喪失
生活難ではない
保険金目当ての殺人
学校の教育力喪失
（学級崩壊）
家庭の崩壊
地域社会の崩壊
などなど

自作随筆選

三人寄れば文殊の智慧？

六月十三日付け読売新聞の「カーブミラー２０００」という欄に、あい次ぐ少年たちの常軌を逸した凶悪な犯罪の原因に対する精神科医たちのコメントを巡る問題を香山リカという、このところマスコミで大活躍の女流精神科医の方が、「『わからない』と認めることから」と題して、記事にしています。

少年たちのこうした、常識でははかりきれない犯罪を了解するためには、一般にはそこに何らかの精神病理の存在を仮定して、病気だから普通は考えられない、そうした行動をするのだと、納得するのが常です。

でも、香山氏も指摘する通り、このところ続いている少年たちの「異常な」としか言いようのない事件は、精神医学を専門とする人たちでさえ、了解しかねているということです。香山氏自身も例のバスジャックの少年は、「重い病のため理性を失っていた」と推理したそうですが、あとでインターネットを駆使していたことを知ったり、「親に見放された」とか「目立ちたかった」とかという普通の少年がいだく思春期に特有な問題の延長線上にあることを知るにつけ、自分の推理が間違いであったと認めざるを得なかったようです。

また、本人の精神についての簡易鑑定では「本人の供述通りだとしたら、精神分裂病以外にはあり得ない。ただし供述の真偽はわからない」とされているとのことです。でも、前にも書いたと思いますが、精神分裂病なら人質にした小１の子への「優しい配慮」が理解できないということです。それについても、人間同志のペット化として述べました。

香山氏は次のように述べています。「少年の精神状態は、医学的に診てどうだったのか。だれもが異なる意見を唱えているということは『結局わからない』と言っているのと同じではないのか」と。

そして最後のところで「今、必要なのは・・・『だれもがわからない』という未曾有の事態が起きつつあることを認めた上で、皆が乏しい智慧を出し合って意味のある方策を練ることではないか」と述べています。

これを読んで驚きました。まさに民主主義の弊害の最たるものだと思えてきます。

民主主義ではあらゆる人が自分の意見や思想を持ち、それを話し合うことでよい解決策が見つかるとするわけ

です。

でも、私に言わせれば、どんなに凡夫が意見を出し合って議論しようとも、たった一人の絶対な境地に到達した人の意見には及ばないのです。それが、どうも理解されないようです。

絶対な境地を1としますと、そこに到達しない人は、0なのです。1か0しかないのです。相対なものと絶対なものとを、数字で表せばそうなるのです。

日本にも古来から「三人寄れば文殊の智慧」ということわざがあります。でも、これは現代のような民主主義の世界に当てはまるものではありません。

三人が三人、文殊菩薩という「智慧の仏」を信じて、その教えに則って生きようとしているとき、三人が寄って相談すれば、その教えに則ったよい智慧に到達することができる、ということを言っているのです。

現代の民主主義のように聖人や偉人を必要としない社会制度では、このことわざは、当てはまらないのです。

たとえ精神科の専門理論を研修し、習得していても人間性への洞察を欠いた人たちが、香山氏の言われるように、皆で「乏しい智慧」を出し合って話してみても、よい対応策が生まれてくる可能性は0なのです。

特に日本のように、民主主義以外に思想と呼べそうなものをすべて捨て去っている国民には、当てはまりません。

西欧には、まだ少しはキリスト教が残っています。ですから、そのキリストの教えに基づいて判断する人もいて、そうした意見は尊重されることがあり得ます。でも、日本のように聖人の教えを失ってしまった国では、そんなことは期待できないのです。

精神科の専門的な理論は、私から見ますと、どれも人間精神への洞察を欠いたものとしか思えません。私が四聖と呼ぶ釈尊や老子やソクラテスやキリストのように、人間性への深い洞察に達した人たちの教えを取り入れたような、「人間精神のモデル」や「人間精神の理論」は存在しないのです。どれも科学の域を脱していません。

今、日本の青年たちが世界でもっともこころが荒廃しています。どの統計調査をみても、それは、明らかです。

その原因は、日本人が思想を失ったこと、それは、倫理を失ったこと、他者性を失ったこと、を意味しています。ですから、精神科医が幾ら寄り集まろうとも、よい解決策など見つかるはずがありません。今、日本に緊急に必要なことは、民主主義を脱して、真の思想を取り戻すことなのです。それを、私は、日本人にもっとも抵抗のない「宥和」の思想にしたらと思っているのです。

釈尊のことば（九二）

―法句経解説―

（三〇七）袈裟を頭から纏（まと）っていても、性質（たち）が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところ（地獄）に生まれる。

この偈は二千五百年前に語られたものですが、今でも立派に通用します。「袈裟を頭から纏っている」とは、坊主のことをいっています。つまり坊主には、性質（たち）が悪く、慎みのない者が多い、ということです。

私も、坊主ですので、仲間の悪いことは言いたくないのですが、現実ですので、私が、見聞きしたことを書いてみたいと思います。

新々宗教と呼ぶべきか、カルト集団と呼ぶべきか分かりませんが、最近、新聞を賑わしているそうした集団の教祖をはじめ、その幹部たちのことをあげていけば、きりがありません。そうではなく、旧来の伝統仏教のことを考えても、もう枚挙にいとまがないほど、あります。

例えば、かつて、この『こころのとも』にも、書きましたが、四国八十八カ所霊場の一つのある寺の住職が放蕩無頼をして、大きく新聞に報道されました。高級外車を乗り回し、「呑む、打つ、買う」の三拍子揃った放蕩で、自分の物でもない寺院を抵当に入れ、莫大な借金をし、ついに檀家から告発されて、逮捕されました。まだまだ、皆さんの記憶に残っていることだと思います。

これほどまでではなくても、四国霊場の寺の住職の中には、高級車を乗り回し、毎晩のように夜の街に繰り出している人は、私の知るかぎりでも結構います。また、それは、この四国だけのことではありません。京都では、花柳界の最も重要な客は、坊主だと言います。私の実際に知るかぎりでも、毎晩のように高級外車にのって京都の夜の街に遊びに行き、使途不明金を何十億も作ったある仏教宗派の座主を知っています。

また、身近な例ですが、近隣で皆が使う道路を拡幅しようとする場合でも、一般の人は交渉に応じて、自分の屋敷さえも譲って出してくれるのに、寺の住職にかぎって、自分の物でもないのに、あるいは檀家から寄進されたものなのに、頑として譲歩しないことを何度も耳にしました。また、ある宗派では、悪いことをするほど救われるのだといって、俗人もしないような悪事を平気でしている坊主さえ、知っています。そして、恐ろしいことは、いまや、こうしたことが何も不思議なことではない、

と多くの人が考えるようになってしまっていることです。明治の初め廃仏毀釈令によって仏教が廃れたとはいえ、この惨状には目を覆うものがあります。一般の人たちがますます信仰を失っていくのも、むべなるかなです。

坊主が悪事を働いたとき落ちる地獄は、無間地獄（むけんじごく）または阿鼻地獄（あびじごく）とされています。この地獄は、次にあげますように、八大地獄の最下層にあります。①責め苦によって命絶えても、また蘇生しては責め苦を受けるという等活（とうかつ）地獄、②鉄の黒縄で身体を巻かれ、それに沿って切り刻まれる黒縄（こくじょう）地獄、③鉄の臼になげ込まれて鉄の杵で打ち砕かれるなどする衆合（しゅごう）地獄、④湯の煮えたぎる大釜に投げ入れられるなどして叫び声を発する叫喚（きょうかん）地獄、⑤これと同じ責め苦により、なお一層の苦しみを受ける大叫喚地獄、⑥猛火・炎熱のために苦しむ焦熱（しょうねつ）地獄、⑦さらに一層の猛火・炎熱の苦しみを受ける大焦熱地獄、⑧間断のない極限の苦しみに身をさいなまれる阿鼻（あび）地獄（無間地獄）。

こうした地獄には、不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒などの戒律を破ったとき墜ちるとされ、特に父母や聖者を殺害し、また、仏の教えを誹謗するなどの重罪を犯した者は、最低最悪の阿鼻に赴くとされています（中村元ほか編『岩波仏教辞典』による）。

でも、いまでは、地獄を信じている人は、とても少ないのではないでしょうか。

私も、論文に書いたことがありますが、親殺しも、子殺しも、一般の殺人もみんな裁判上での罰は、同等です。最近の判決を見ていますと、どちらかと言えば、一般の殺人より、親殺しのほうが、軽いぐらいです。こんな判決は、人々の規範意識を喪失させ、この世に地獄を実現させるものです。先日、岡山県の長船町で起こった高校生（一七歳）のバットによる母親撲殺事件のごときは、まさにその例です。昔なら、誰にとっても母ほど大切な人はいない筈なのですが。ですから、こんな裁きをする裁判官も、因果な職業とはいえ、悪業を重ねて、きっとあの世では無間地獄で苦しむことでしょう。

（三〇八）戒律をまもらず、みずから慎むことがないのに国の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがましだ。

この偈も坊主を対象にしているように思えます。坊主なのに戒律も守らず、身も慎まないような人は、お布施

を頂く資格はない、といっているのです。後半の「火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがましだ」とは、厳しいことばで、そんなことをすれば、死んでしまうと思いますので、この言葉は、そんな人は、死んだほうがましだと言っている、と思います。

前の偈で述べましたように、いま、坊主が破戒行為を平気で侵すようになっています。たとえ明らかな破戒まではいかなくても、自らの修行の足らなさを省みず、修行を怠って、ひたすら自分の悩みを詩や書に書いて、金儲けに余念のない坊主まで、身を慎まない坊主は掃いて捨てるほどいます。また、それを悪いこととも思わない、いな、立派なこととさえ思う世間の風潮があります。嘆かわしいことです。

もっとも、最近はお布施とは名ばかりで、檀家から頂く「お金」は、坊主の葬式屋としてのサービス料の色合いを強めています。因みに、安い戒名料を包みますと、あとで請求がくることでも分かります。お布施は、もともと、反対給付を期待しないで、自発的に為すもので、けっして請求するものではありません。坊主のするお布施は法施でなければなりませんし、檀家は、それに対して、心から感謝し、自分の大事なものを、自らの意志で差し上げなければなりません。

（三〇九）放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。――すなわち、禍をまねき、臥して楽しからず、第三に非難を受け、第四に地獄に落ちる。

この偈ほど、いま求められているものはないと思います。いまは、他人の妻になれ近づくことが、悪いことだとは、ほとんどの人が思わなくなっているのではないでしょうか。寝取られる方がとろくさいく、悪いと思っている、とさえ思えます。二人が合意でセックスに及ぶことは、本人たちの「自由」であって、他者からとやかく言われる問題ではない、というのが、いまの自己追求の制度である民主主義や個人主義が生み出した「フリーセックス」の「教え」だと思います。二人で楽しむことは、誰の迷惑にもなっていない、というわけです。

何年か前のことですが、講演で私が作った次の詩

二つの感謝

させて頂いて
ありがとう

して頂いて
ありがとう

を紹介したところ、そのあと開かれた懇親会で、ある人が、私の席に近づいて、あの詩は浮気でのセックスのことをいっているのですか、と冗談半分で、自分はいいことに気づくだろうとばかりに、ひやかしに来ました。驚きました。私はそんなことは考えたこともなかったからです。私はその講演で、お布施というものは、こうした気持ちでしなければならない、という説明をしていたので、そんなところへ連想がいくことが、考えられなかったのです。

現代は、この詩をセックスのことを詠じていると感じるほど、人々の関心がセックスにいっているのです。

私は、テレビドラマはほとんど見ませんが、どうも最近のテレビ番組の多くが、恋愛のような性愛をテーマにしているようで、憂うべき現象のように思います。

何度も書いていますように、民主主義は自己追求の制度です。必然的に他己は萎縮してきます。他己は倫理や道徳、伝統や規範などをなすもので、それらが、いま廃れてきていますが、当然といえば当然の帰結なのです。

自己を追求するということは、基本的には自己の情動を追求することです。情動は欲望と情緒と気分などからなっています。欲望には、何度も何度も書いていますように、基本的に三つあります。①食欲、②性欲、③優越欲です。①食欲には、物（経済）欲、金銭欲などが含まれますし、②性欲には、恋愛欲、情愛、子孫繁栄欲などが含まれます。また、③優越欲には、権力欲、出世欲などが含まれます。

こうした情動の追求は、仏教では煩悩と呼ばれ、抑えるべきものとされています。顕教では坊主が常に唱える「四弘誓願」という誓いがありますが、その一つに「煩悩無尽誓願断」というのがあります。それほど、情動の追求は戒められているのです。

実は、民主主義社会の現代人が生き甲斐にしています自己の情動を追求し、それに執着を強めることは、人間を決して幸福にしないのです。情動が満たされれば、こころが豊かになると思われていますが、それは、ますます自己が空虚になっていく道なのです。

真のこころの満足は、誰かと本当にこころが通っていると感じる時なのです。その誰かが「絶対他者」であるとき、不動のこころを得るのです。

性欲の追求が悪であると考える社会が早く来ることを祈りたいと思います。

後記

一、今年の梅雨は、全体としては雨が少なかったのでしょうか。讃岐では、もう畑がやけてきています。一雨ほしいと思うのですが、なかなか降ってくれません。

二、少しずつ掘っていたジャガイモを先日、すべて掘りました。今年は結構たくさん植えましたので、リンゴ用の段ボール箱に五箱ほど取れました。

三、ジャガイモの食べ方にはいろいろありますが、わが家では、次のような食べ方をよくしています。イモをラップで包み電子レンジして、そのまま冷します。冷えたらラップをとり、手で皮をむいて、五ミリ程度に切り、バターを塗ってとろけるチーズを乗せ、もう一度、オーブンで温めます。とても美味しく、いくらでも食べられます。さつま芋は、たくさん食べますと、胸焼けがして困りますが、ジャガイモはそんなことはありません。つい、食べ過ぎて困るほどです。このところ主食になった感じです。

四、それから、先日、植えていた一五〇本のさつま芋に、カヤを刈り、おしぎりで切って、畝や溝に敷きつめました。とてもきつい作業でしたが、ゼミ生の人にも手伝って頂きました。有り難いことに、よい経験になると言ってくれています。

五、いま、肉体労働は嫌われ、ほとんどの作業が機械化されていますが、でも、人間には、こうしたじかに身体を使った仕事がいるのではないでしょうか。特に、子どもの教育のためにも、もっと、子どもの時から、こうした農業の体験をせさることが必要なように思います。苦しくても大人と共に汗を流して働くことが、大人の権威を取り戻す道ですし、子どもに苦しみながらしなければならない仕事があることを身を持って知らしめることができるからです。いまは、百姓の人でも、子どもを労働力として働かせている人は、まったくといっていいほど見かけませんが。

月刊　こころのとも　第十一巻　七月号（通巻一二七号）

平成十二年七月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660